

朝起きたら頭がぼーっとしていた。

昨夜はいきなりカズミとリカコが訪ねてきて、突如宴会になってしまったのだ。この子たちは一番仲のいい友達で、それが災いして、連絡もせずいきなり訪ねてくることがあるのだ。

まったく迷惑な話だが、私はこの二人をとくに可愛いと思っているので憎めないところがある。飼っている猫がイタズラをしても憎めないのと同じだ。

私たちは美容アカデミースクールの同期生で、常に一緒に活動していた。三人とも美容業界に憧れを持ち、三年間のカリキュラムを終えて卒業後、カズミは美容師になり、リカコはファッション関係の仕事をしている。

卒業後でも常に連絡を取っては、ごはんを食べに行ったり飲みに行ったりと、繋がりは絶えなかった。

カズミは二十六歳でリカコは二十九歳。私はというと現在三十五歳で、彼女たちよりも、少し？ だけお姉さんなのだ。

さて、お姉さんと言えるかどうか分からないが、私は元男で、生まれつき自分の性別に疑問を持って、ずっと悩んでいた性同一性障害だった。

心は女性だが、体が男であるために高校卒業まで悩み、ずっと女になりたいという気持ちを持ち続けていた。

できれば性転換手術をしたかったけど、それもすぐには決断できず、三十歳でようやく決心して手術をしたのだ。

なぜ三十歳だったかという、その年に父が他界し、それをきっかけにして母にカミングアウトをしたのだ。そのことを母に話したら「わかってたよ。なんとなくそんな気がしてた。

あんたの好きにすればいい」と言ってくれた。そんな紆余曲折があって、私はようやく手術をする決断をしたのだった。

手術は睾丸の摘出だけにしておいた。竿(ペニス)まで取ってしまうのは怖かったし、費用も倍かかってしまう。

それになぜか男としてのセックスもしたかった。メンタル的に男の部分が残っているのかも知れない。これからも性生活は充実させていきたいと思っていた。

睾丸を取ったお陰で女性ホルモンが分泌されて、体が女性化してきた。髪が伸びるスピードも早くなり、細くしなやかになってきた。

肌もスベスベになったし、体に丸みも帯びてきた。まさしく理想の体系になってきたのだ。そして胸の膨らみも。

巨乳には程遠いが、Aカップほどには成長した。それほど期待はしていなかったなので、私はそれでも十分満足だった。

美容アカデミースクールに入学したのは、手術してから一年後だった。すでに体は女性化しており、もちろん着る服も女性物だった。その学校は男性でも入学できるが、私はそれを隠して、女性として入学していた。

カズミもリカコも私が元男だと言ったら驚いていた。「ええ！ ニューハーフだったの？」と言って、二人とも何が嬉しいのかテンションが上がり、カズミなどはいきなり私の胸をガバッと掴んできて、しかも揉んだのだ。

そして言ったことが面白かった。「いいじゃん、女の子同士なんだから」と言ってくれた。この言葉には正直救われたし、嬉しくもあった。

二人ともニューハーフと友達になれたことが嬉しかったようだった。彼女たちは正真正銘の女性だ。

昨日はカズミとリカコは一緒にゴハンを食べて、話が盛り上がり、「これからマユミさんのところへ行こう」ということになり、突然押しかけてきたらしい。カズミはいつものように私の胸を触って、「また大きくなったね」なんて言ってくれた。

私は男時代の姓をそのまま使い、片桐真由美を名乗っている。彼女たちは「マユミさん」と呼んでくれる。

私の現在の仕事はというと、3LDKのマンションで女装サロン「プチガール」を経営している。実は美容アカデミースクールに通ったのも、この女装サロンをやりたいからだった。

メイクだけでなくファッションやヘアカットなども勉強して、プロとして、綺麗になりたいという女装子さんたちのお手伝いをしてあげたいという思いからだった。

それが功を奏して、私の店は順調に売上を伸ばし、ニューハーフのお店ということも話題になり、私に会いたくて来てくれる男性客がほとんどだった。メイクの技術にも自信があったし、ヘアカットも好評だった。

男性が女性みたいな髪型にしたいと思ったときに、普通の美容室へ行くと、たいていの場合は男でも女でも通用するような髪型にされることが多いのだ。「女装している」と言えばいいのだが、さすがに美容室で店員にそれを言う勇気はない。

それが女装サロンなら堂々と言える。そんなメリットもあって、ヘアカットだけで来てくれるお客さんも少なくない。店内には美容アカデミースクールの卒業認定証が掲げてあり、それもお客さんへの信頼度に繋がっている。

私の現在の平均月収は百万だ。メニューの中の最低料金のコースでも六十分、一万五千円で、オススメの三時間コースが三万五千円だ。

高額だと言う声も聞くが、私はびた一文安くするつもりはない。私がここまで来るのにそれなりに苦勞しているし、技術的にも自信はある。

来てくれたお客さんは毎回、どのお客さんも美しく仕上げているという自負はあるのだ。文句を言う客は来てくれなくていい、と思っている。